

(1) 自閉症スペクトラム児への構造化された指導法に対する親の期待

— 療育機関を利用する親への質問紙調査を通して —

川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学専攻 修士課程 木村友香理

川崎医療福祉大学 医療福祉学科 小林 信篤

【要 旨】

自閉症スペクトラム児(以下 ASD 児)への支援手法として TEACCH プログラムにおける構造化が評価されており,その TEACCH プログラムでは家庭での構造化実践を重要視している。わが国において,家庭での構造化実践に関する研究は少数であり,その中でも親による家庭での構造化の実態を調査した研究はなされていない。本研究では,家庭における構造化実践に関する実態および家庭での構造化実践に影響を与える要因について明らかにすることを目的とした。研究方法は,質問紙を用いて療育機関を利用する ASD 児の親を対象に,構造化(物理的構造化,スケジュール,ワーク・システム)についての①理解,②有益性の実感,③家庭における実践状況について 4 件法で質問をした。調査結果は以下の通りである。回収数は 41 名(54.7%)であった。いずれの支援手法においても,理解および有益性の実感についての肯定的回答と比較して,家庭におけ

る実践状況についての肯定的回答の割合のみが 20~30% 下回っていた。このことから,ASD 児の親は構造化についての理解があり,有益性を実感しているものの,その理解と実感のみで実践につながるとは限らないということが分かった。また,家庭での構造化実践と子どもの属性,療育機関の利用状況との関連性について,Fisher の直接法による検定をおこなった。その結果,スケジュールについて,療育目的の A 事業の利用経験と家庭での実践に関連性が見られた。他の事業については関連性が見られなかったことから,A 事業のサービスの特色である療育計画と個別相談が,家庭でのスケジュールの実践に影響を与えているのではないかと考えられる。今後,ASD 児の親へのインタビュー調査を実施し,家庭での構造化実践をおこなうために,有益性の実感以外にどのような要素が影響しているかという点について具体的に明らかにしたいと考えている。